



ヒューマンコミュニケーショングループ ニュースレター
 2010年度 No. 1
<http://www.ieice.org/hcg/jpn/>



- Contents —
- ◆ 新運営委員長挨拶
 - ◆ ヒューマンプロープ (HPB) 研究会活動報告
 - ◆ FIT2010 MVE研究会主催イベント企画開催案内

新運営委員長挨拶
 “ヒューマンコミュニケーションにより情報の伝達を考える”

2010年度ヒューマンコミュニケーショングループ運営委員長
 美濃導彦 (京都大学)

情報社会はコミュニケーションに対する技術革新がもたらしたものです。情報の本質を考えるに当たってはデータ通信やコミュニケーションを抜きには考えられないことは、シャノンの情報理論が通信理論として発表されたことから理解できるでしょう。情報社会の一番核心の部分の研究対象としているのが、ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) です。HCGの研究領域には、人間同士および人間とシステムの多彩なコミュニケーション、人間とシステムの社会的な関係、情報を伝える情報メディアなどに関する研究が含まれており、情報技術をツールとして使う多くの研究領域から多様な研究者が集まって情報とは何か、それをどう伝えるのかなどを中心に議論をしています。電子情報通信学会と言うと技術系で難しいことを議論している学会だと思われがちですが、そんな中で理科系と文化系の融合的な領域で、いわゆる情報分野を横断したような活動を精力的に展開しています。

コミュニケーションは2つ以上の個体 (人間や情報システム) が相互に情報をやり取りする過程で、その結果双方が変化するものと考えられています。これはかなり高度なレベルの記述で、これを実現するためには、まず、人間や機械の情報入力処理のプロセスを考える、受けとった情報を加工し相手に伝えるべき情報に変換するプロセスを考える、処理結果を表示する出力プロセスを考えるという3つのプロセスを研究しなければなりません。これらが双方でかみ合ってインタラクションが成立し、その結果受け取った情報を解釈して自分を変えるという処理が必要になります。

HCGは、このような過程を様々な視点から議論する研究会の集合体です。研究会は生き物のようにダイナミックに変わっていくことを期待していますが、現在ある研究会を以下に簡単に説明します。人間同士のコミュニケーションを基礎的に考えている「ヒューマンコミュニケーション基礎研究会 (HCS)」、人間側の情報処理にフォーカスを置いている「ヒューマン情報処理研究会 (HIP)」、新しいメディアを用いたインタラクションやインターフェースを議論する「マルチメディア・仮想環境基礎研究会 (MVE)」、障害を持った人たちとのコミュニケーションを考える「福祉情報工学研究会 (WIT)」、情報社会で中心的な役割を果たしているWebというメディアを介してのコミュニケーションに焦点を絞った「Webインテリジェンスとインタラクション研究会 (WI2)」、発達障害者の発見と支援方法の確立を目指す「発達障害研究会 (ADD)」、人が持ち歩くセンサ情報を利用して人間や環境に関する情報を共有し、利用することを目指す「ヒューマンプロープ研究会 (HPB)」、医療関係者とコミュニケーションの議論を深める「先端医科学技術研究会 (AMST)」、人間同士のコミュニケーションをインタラクションの側面から議論している「ヴァーバル・ノンヴァーバルコミュニケーション研究会 (VNV)」、料理というメディアを介したコミュニケーションや人間支援を議論する「料理メディア研究会 (CM)」、情報社会の倫理を考える「人間とICT研究会 (EHI)」があります。研究領域に関してはすべて私見ですので、現在の研究会の委員長の先生方は違ったことを考えておられる可能性があることを申し添えておきます。

HCGが対象としている問題は、これらの研究会だけでカバーできているとは思いません。まだまだ、違った視点からの、違った研究領域の先生方とのコラボレーションが必要ではないでしょうか？何か新たなことを始めたいと思っておられる研究者の方々には、考えておられる研究領域に近い研究会に一度参加してみてください。いくつかの研究会に参加されて、議論がかみ合わない場合や方向性の違いを感じられたら研究会の新設を提案されてはいかがでしょう？HCGでは新たな視点からの研究会やこれまでにない研究領域とのコラボレーションを目指す研究会の新設に関する提案は大歓迎です。気軽に研究会に参加できるだけでなく、気軽に新たな研究会が作れる、不要になれば解散できる、という柔軟な活動ができること、これを大切にしているのがソサイアティとは違うグループ (HCG) の特質であります。積極的にご利用くだされば幸いです。

今後ともHCG活動へのご参加・ご支援をお願いいたします。

委員長
木實新一 (東京電機大学)

■ HPBの活動テーマ

スマートフォンやパーソナルセンサの利用が進みつつあることを背景に、本研究会では人間活動とセンサが密接に絡み合ったデータ取得・共有環境をヒューマンブローブと呼び、人-センサの新しいシステムを様々な観点から議論できる場を提供すべく、国内研究会や国際ワークショップの開催、そして他研究会とのコラボレーションを行っています。

■ 国際ワークショップの開催

HPB研究会では、近隣諸国の研究者との交流によって議論をより豊かなものにすると考え、国際ワークショップを開催しています。2009年4月に研究会が発足してすぐに Asian Workshop on Sensing and Visualization of City Human Interaction (AWSVCI 2009) を計画し、同年8月27日に北京大学で開催しました。日本および中国から12件の発表があり、19名の参加者が活発な議論を行いました。有意義な研究交流が可能なプログラムを作るためにアブストラクトの査読を行い、著者とシェパード(世話役のプログラム委員)がコミュニケーションをとりながら論文を仕上げました。これによって議論の多様性と統一性をうまくバランスさせることができたと考えています。なお、2010年度にはバンコクでAWSVCI 2010の開催を計画しましたが、残念ながら現地における政情不安のため中止となりました。

■ 他研究会とのコラボレーション

年一回のペースで、情報・システムソサエティのユビキタスコンピューティング研究会 (UBIC) と合同でイベントの企画等を行っています。このコラボレーションによって、2009年9月にはFITのイベント「街中を移動する人によるセンシング」、2010年6月には招待講演とパネル討論を中心としたミニワークショップ (Mini Workshop on Internet of Things) が実現されました。また、HCGの第三種研究会である人間とICT倫理研究会 (EHI) が2009年12月に開催したイベントにも協力しました。

■ 今後の活動方針

近年 iPhone および Android プラットフォーム、そして Twitter のようなサービスが急速な広がりを見せており、これらを用いて大規模なヒューマンブローブ環境の実験を行うことができるようになりつつあります。その一方で、良いアイデアを持った企業や個人プログラマーが、魅力的なアプリケーションやサービスを短期間で開発・配布できる環境が整いつつあるともいえます。HPB研究会はHCGの時限付き第二種研究会としてスタートしましたが、このような状況の中にHPBという学術コミュニティの活動成果が発展的に統合されるための道筋を固めながら2011年3月末までの活動を行う予定です。

FIT2010 MVE研究会主催イベント企画開催案内

全へい東 (千葉大学)、川本一彦 (千葉大学)

2010年9月7日～9日に九州大学伊都キャンパスで開催される第9回情報科学技術フォーラム (FIT 2010) において、マルチメディア・仮想環境基礎 (MVE) 研究会主催のイベント企画「仮想社会と電子書籍 - 紙の本はなくなるか?」

(9月8日16:00-18:00) を開催いたします。
<http://www.ipsj.or.jp/10jigyo/fit/fit2010/>

ここ数年、書籍の電子化・コンテンツ化への流れが急速に進展しています。例えば、Google社のサービスであるブック検索とその権利問題、iPadやKindleなどの電子書籍端末の登場、さらに国立国会図書館所蔵資料のデジタルアーカイブ整備などマスコミ紙上を賑わす話題がつきません。本企画では書籍の電子化やそれを前提としたサービスなどに関連する最新動向を各分野の一線でご活躍の方々にお話しいただき、ネットワーク時代の書籍や図書館のあり方について多面から議論する場を提供します。

講師陣には、国立国会図書館館長として国内の書籍電子化を主導されておられる長尾真先生、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター長として検索システム「想・IMAGINE」を開発され多方面に展開されておられる高野明彦先生、千葉大学総合メディア基盤センター長 (前千葉大学附属図書館館長) として今後の図書館界のあり方について積極的に発言されておられる土屋俊先生、そしてGoogle社でGoogleブックスやGoogle Editionsの国内展開を進めておられる佐藤陽一氏をお招きしています。

